Orlando と *A Room of One's Own* における「教養に裏付けられた食い意地」

大　西　祥　恵

1．はじめに

Virginia Woolf のエッセー *A Room of One's Own* の中には、二つの有名な食事の場面が登場する。それは、このエッセーの語り手が、男子学寮と女子学寮でとる食事である。男子学寮の食事会では、真っ白なクリームがふんわりかかり、「小鹿の脇腹の斑点」のような茶色の斑点のつけられた舌平目に、おいしいソースと意匠の施された山うずら、「薔薇のつぼみ」のような芽キャベツに「貨幣のように薄いがそれほど固くない」じゃがいもや焼肉、砂糖が美しくたっぷりかかったプディングが出され、最後に「ワイングラスが黄色と真紅に輝く」(13)。この食事をとった後、語り手は、天にも昇るような幸福感に包まれ、崇高な芸術は、このような精神によってもたらされるのだと思う。男子学寮で出された見た目も色鮮やかで豊かで豪華な食事とは反対に、女子学寮の食事は、「創造力をかきたてるものが何もない」ほど貧相だ。透き通る以外に何のとりえもない粗末なスープに、じゃがいもと黄ばんだ青野菜が添えられた量の多さだけは十分な肉料理、干しプラムは筋張っていて固く、ビスケットはパサパサしていて飲み込むためには、水で流し込むしかない（21－22)。このような粗末な食事では、会話は弾まず、食事を済ませると会席者達は足早に去ってしまう。そしてこうしたまずい食事が生み出すのは、「うつろで弱々しい精神状態」であり、「よい夕食は、よい語り合いにとって非常に重要だ」「もしよい食事を食べなければ、人はよく考えることも、よく愛することも、よく眠ることもできない」(23) と語り手は訴える。この二つの食事を比較することで、ウルフはジェンダーの非対称性や食事が精

神活動に及ぼす影響を明らかにしている。

さらにウルフは、こうした精神活動の中でも、とりわけ書くことと食べることの結びつきを示している。その関係は、*Orlando* と『自分だけの部屋』において特に顕著である。『オーランド』では、女性の文学の歴史が400年の時を生きる一人の詩人の生涯に重ね合わせられており、ほぼ同時期に書かれた『自分だけの部屋』と同様に、女性が作家として書くことについて探求され、こうした関係がはっきりと表れている。『オーランド』に登場する作家達は、食べることに精通している。Shakespeare は、旺盛な食欲を暗示するかのように太っており（21）、詩人の Nicolas Green は「三百種類の異なるやり方でサラダを作ることが出来」、「チーズをイタリア製の暖炉であぶる」（88）という斬新な調理法をオーランドの前で披露する。さらに Addisson や Dryden や Pope は、コーヒーハウスでコーヒーを飲みながら、議論を戦わせ（160）、彼らは、社交界でひっぱりだこであり、貴婦人達にお茶に招かれ、彼女達が入れてくれるお茶が好きである（199）。本論文では、『自分だけの部屋』と『オーランド』の中のこうした食べることと書くことの結びつきについて考えていきたい。

2．食べない女達

ウルフが、人間の内面よりも外的な事実に重きを置く Arnold Bennett や H. G. Wells のようなリアリズム作家達を「物質主義者」だと批判し（“Modern Fiction,” 7）、よりリアルな人物描写を目指すべく、「意識の流れ」を用いて人間の内的心理を描いたことはよく知られている。そのため彼女は、人間の外見描写よりも内面描写を重視していたと一般的に考えられている。しかし「心と体や脳は融合しており、別々の仕切りで仕切られていない」（*A Room of One's Own*, 23）」と述べているように、ウルフは、人間の内的心理に光を当てるのと同時に、外的な要因の内面への影響についても関心を抱いていたようにみえる。例えば彼女は、『自分だけの部屋』の中で、「もし女性が小説を書こうとするならば、お金と自分だけの部屋を持たなくてはならない」

(139) と訴え、こうした外的な要因が内面にもたらす影響を辿っている。その外的な他の要因として彼女が注目したのが、衣服や食事が、内面に与える影響である。

男性から女性へと変身したオーランドは、最初、「男性のオーランドと女性のオーランドは、何の違いもなく」(179)、その「アイデンティティーは変わらない」(133) と考えていた。しかし実際には、男性から女性になったことで、何も変化しないわけではないことに気づく。女性らしい衣装に身を包んだオーランドは、時を経て次第に、「頭脳に関しては、女性らしく、少し慎ましくなり、性格に関しては、女性らしく、うぬぼれやすくなり」、「感受性のある部分は高まり、他の部分は弱まった」(179) と感じる。これは全てオーランドが身に着けている女性らしい衣装による影響である。語り手は、「衣装は私達を暖めるだけではない重要な役割を持って」おり、「私達が衣装を身に着けているのではなく、衣装が私達を身に着けている」という (179)。そして「私達は、衣装を腕や胸のかたちに作り上げるが、衣装は私達の心、頭脳、舌を自分達の好きなように作り上げる」(180)。このように衣装は外見だけでなく、身に着けているうちに内面をも変化させ、着ている者に知らず知らずに衣装に見合った性役割を演じさせてしまうのだ。

スカートを着た彼女に対する男性達の反応により、彼女は衣装による影響を目の当たりにすることとなる。船長は「オーランドのスカートを見て、すぐさま彼女のために日よけを広げさせ、牛肉をもう一切れ取るように勧め、一緒にボートに乗ろうと誘った」(179)。これらの敬意は、オーランドのはいているスカートに対して払われたものである。その敬意に対して、オーランドはお返しをするように求められる。

> Dinner came before she had untied it, and then it was the Captain himself — Captain Nicholas Benedict Bartolus, a sea-captain of distinguished aspect, who did it for her as he helped her to a slice of corned beef.
>
> 'A little of the fat, Ma'am ?' he asked. 'Let me cut you just the tiniest little slice the size of your finger nail.' At those words a delicious tremor ran

through her frame.（*Orlando*, 148－149）

男性であった頃、オーランドは、ニック・グリーンと共に、鹿肉や鴨料理などの豪華な食事を思う存分堪能していたが（83)、女性になったオーランドに対して船長が切り分けることを申し出たのは、コーンビーフの「少しの脂身」や肉の「指の爪くらいの最も小さい一切れ」に過ぎない。彼女は、船長の求めるように自身の食欲を抑え、女性らしく振る舞うことで、男性に「身をゆだねる」という「すべての中で最も美味なもの」を得る（149)。男性であることと女性であることの両方を経験したオーランドは、「男性と女性のどちらでいる方」が「エクスタシーを感じる」のかと考え、「抵抗し」た後、「譲歩して船長がほほ笑むのを見るのは最高の楽しみ」だと「追いかけ」られ、相手をじらし、「逃げる」側の喜びを感じ、船長との駆け引きを楽しみながら女性であることの喜びに浸る（149)。

さらにオーランドは、女性であることの「特権」と同時に、その「ペナルティー」(147）に気づく。彼女は、男性達が様々な職業に就き、社会的な役割を与えられているのに対して、女性が出来ることは、「お茶を注ぎ、客人に対して、お気に召しましたかと尋ね」たり、「お砂糖はいりますか、クリームはいりますか」と気を配ることだけだと考え、女性の「意見がいかに低く受け取られているのか」知り、愕然とする（151－152)。このように18、19世紀において女性の社会進出は難しく、家事や育児を使用人がしていた、上・中産階級の女性達に与えられた数少ない仕事は、ホステスとして客人をもてなすことだった。

ウルフが *Mrs Dalloway* や *To the Lighthouse* を通して、パーティーや晩餐会でホステスを務める女性達の誇りと苦悩を描いたことはよく知られている。それにより歴史の中に名前を残すことのない無名な人々である彼女達がいかに豊かな思考を持っているのかを明らかにしている。彼女達がパーティーや晩餐会やお茶会を開くのは、単に夫のためだけではない。それらの場所は、彼女達の創造力や芸術性を発揮できる場所でもあるのだ。彼女達は、会食者

同士の相性を慎重に見極めることで、隣同士に誰が座るかを決める。そしてそれまで交流することのなかった会食者同士が、お互いに親密になり、打ち解けることで、調和のとれた会になるよう、それぞれの個性を大切にしながらホステスとして客人達をもてなす。このことは、画家が絵画において、異なる色や形のものを組み合わせることで、不調和なものの中から調和を生み出そうとすることと類似しているように思われる。さらに彼女達が料理の内容やその組み合わせ、皿の配置や装飾のための花などについて使用人に指示する際も、その美意識が問われる。Ramsay 夫人と Clarissa Dalloway は、こうしたホステスの仕事に誇りを持っている。注意すべきことは、Dodd が指摘するように、ラムジー夫人やクラリッサ・ダロウェイのような女性達が、ホステスとして客人達をもてなし、「他人の栄養的、感情的な要求を満たすために、他者に」食べ物を「準備し与える」一方で、「彼女達自身が食べ物を食べるところを決して見られることがなく」(152)、食欲を持たないかのように描かれているということである。「ヴィクトリア朝文化では、食欲を否定することで女性らしさを示すように教えられていた」(Angellella 174) ため、家庭内天使を理想とするヴィクトリア朝の性的規範では、女性は食欲がないかのように振る舞うように求められていたのである。

オーランドもまた著名な文豪達を屋敷に招き、お茶会を開き、ホステス役をつとめるのだが、「男達が共有するちょっとした秘密」を察知した彼女は、お茶会に対して確固たる嫌悪を抱き始める。

> … there is a little secret which men share among them; Lord Chesterfield whispered it to his son with strict injunctions to secrecy, 'Women are but children of a larger growth.… A man of sense only trifles with them, plays with them, humours and flatters them', which, since children always hear what they are not meant to, and sometimes, even, grow up, may have somehow leaked out, so that the whole ceremony of pouring out tea is a curious one. A woman knows very well that, though a wit sends her his poems, praises her judgement, solicits her criticism, and drinks her tea, this

> by no means signifies that he respects her opinions, admires her understanding, or will refuse, though the rapier is denied him, to run her thorough the body with his pen. All this, we say, whisper it as low as we can, may have leaked out by now; so that even with the cream jug suspended and the sugar tongs distended the ladies may fidget a little, look out of the window a little, yawn a little, and so let the sugar fall with a great plop as Orlando did now — into Mr Pope's tea.（*Orlando*, 204 – 205）

お茶会に招かれた男性達は、密かに「女性は大きくなった子供に過ぎない」と考え、女性達を馬鹿にしている。そしてホステスとして男性達をもてなす際、「才人が彼女に詩を送り、彼女の判断力を賞賛し、彼女の批判を求め、彼女のお茶を飲むのは」、彼らが「彼女の意見を尊重しているわけでも、彼女の理解力を賞賛しているわけでもない」のだということをオーランドは痛感する。そして女性が何か意見を言えば、瞬時に「体にペンが走り」、その意見は男性達によって書き替えられてしまう。つまり彼女達は「自然な大きさの男性を二倍にして映し出す魔法とおいしい力を持った姿見としての役割を果たしている」（*A Room of One's Own*, 45）に過ぎないのだ。このように女性達は、ホステスとして男性達をもてなしている間、自身の食欲だけでなく、自分の意見を持つことさえも妨げられてしまう。

家庭内天使を理想とし、自分の欲望を抑え、他者のために仕えるというこのホステスの精神は、当然のことながらオーランドの詩作にも影響を与えないではいない。

> Orlando, who had just dipped her pen in the ink, and was about to indite some reflection upon the eternity of all things, was much annoyed to be impeded by a blot, which spread and meandered round her pen. It was some infirmity of the quill, she supposed; it was split or dirty. She dipped it again. The blot increased. She tried to go on with what she was saying; no words came … No sooner had she said 'Impossible' than, to her astonishment and alarm, the pen began to curve and caracole with the smoothest possible fluency. Her page was written in the neatest sloping Italian hand with the most insipid verse she

had ever read in her life.…（*Orlando*, 227）

時代精神が女性に求める性規範と家庭内天使的な女性像に縛られるあまり、オーランドの羽ペンは弱々しいものになり、彼女は、「彼女が生涯で読んだ中で、最もおもしろみのない」感傷的な詩しか書くことが出来ない。

ウルフは "Profession for Women" の中で、この家庭内天使像がいかに当時の女性作家達を苦しめていたかについて語っている。この中では、男性作家が書いた本を書評しようとしている女性の苦悩が描かれている。公平な意見を書くことは、男性達の誇りを傷つけ、次の仕事の機会を失うことになりかねない。反対に、相手をたて同情的に優しく接し、自分の考えを持たないように振る舞うことは、批評の質を低下させ、批評家としてのレベルを落とすことになる。その葛藤は、家庭内天使との戦いとして表れている。そしてもしこの天使を「殺さなければ」、「彼女は、私が書くものの心臓をむしり取り」作家としての自分が殺されてしまうのだと彼女は考える（141－142）。このようにウルフは、「家庭内天使を殺すことは、女性作家の仕事の一つである」（141）と家庭内天使像からの女性達の解放を訴えている。

3．自分だけのための食事

家庭内天使的な女性像とは対照的に、『自分だけの部屋』の語り手は、食欲を持つことを否定するという当時の女性の性規範の枠にはまらない食べる女であり、「あたかも重要ではないかのように」「食べている物についてほとんど言及していない」小説家達の態度を「因習」的だと批判し、その「因習を無視して」、彼女が口にした食事の内容について赤裸々に語っている（12－13）。この語り手は、テクストの中で三回食事をするのだが、その度に食の持つポリテックスを痛感する。注目すべきは、語り手がレストランで、一人で食事をする場面である。

It came to five shillings and ninepence. I gave the waiter a ten-shilling note

> and he went to bring me change. There was another ten-shilling note in my purse; I noticed it, because it is a fact that still takes my breath away — the power of my purse to breed ten-shilling notes automatically. I open it and there they are. Society gives me chicken and coffee, bed and lodging, in return for a certain number of pieces of paper which were left me by an aunt, for no other reason than that I share her name.（*A Room of One's Own*, 47）

食欲を公衆の前にさらすことになるので、ウルフが生きた時代にあって、一人で外食する女性は、新しい女だけであったようで（Angelella 181）、当時、女性が一人で外食をすることは、かなり進歩的な行いであった。レストランで、一人で食事をし終えた語り手は、会計の際、「10シリングを自動的に生み出す財布の力」を痛感する。このように食事には、「財布の力」が宿っているのだ。

こうした消費は、創作においても重要である。ウルフは、理想的な作家の精神を「あらゆる障害物を消費する精神」としているが、作家は、生産者であると同時にあらゆる事柄を自身の中に取り込む、消費者でなくてはならない。この関係は、『オーランド』にも見られる。若き青年であったオーランドが「文学愛に感染し」、よりよい詩を書くために、本を買い、それらを読みあさり（71－74）、そこから創作する。こうした読書と創作もまた「消費」を経た、生産行為であるといえる。さらにこうした書くことと食べることの結びつきは、オーランド自身が執筆する際にも見られる。男性から女性になったオーランドは、ジプシーの群れに加わった際に、ジプシー達の言葉では「美しい」という言葉がないのでその代わりに「なんて食べるために素敵でしょう（How good to eat！）」（137）という言葉を代用し、執筆のためのインクを木の実やワインから作る（140）。この時、彼女にとって、美しい景色は、「考えるための食べ物」であった（135）。さらに『自分だけの部屋』の中では、本は、「考えるための食べ物」（32）であり、「知識や冒険、芸術」は、「奇妙な食べ物」と呼ばれている（101）。このように「考えるための食べ物」を作家が摂取し、消化することによって、文学作品が生み出されるのである。

こうした精神と身体にとって食べ物が果たす機能を考えると、女性が食欲を抑えたホステスから食べる女性になることは、ものを書く上で重要であるといえる。Angelella が指摘するように、「食べることは欲望を持ち」、「主体として自己を主張する」（174）ことである。欲望を持つことで、客体ではなく、主体となるということは、書く行為にとっても不可欠である。なぜなら創作意欲は、とりわけ強い欲望であるからだ。それまで女性達は、書かれる客体として「あらゆる詩人の全ての作品の中でベーコンのように燃やされ」（*A Room of One's Own*, 55）、男性達の欲望を満たす提供物としてささげられていた。しかし書かれる客体から書く主体になることは、欲望される対象から欲望する主体になり、他者の欲望に仕える為に、食べ物を提供するホステスから食べる女性になることでもある。「もし女性が小説を書こうとするならば、お金と自分だけの部屋を持たなくてはならない」というウルフの言葉は有名だが、このお金は、「熟考する力を表し」、「鍵のかかった部屋は自分のために考える力を表している」（*A Room of One's Own*, 139）。それと同時に彼女達は、栄養が行き渡った心と体でもって創作に臨むために、おいしい食べ物と豊かな「考えるための食べ物」を摂取する必要がある。

女性に求められる性規範に応じ、食欲を抑え、ホステスの役に甘んじていたオーランドであったが、歳月を経て次第に「大変お腹がすいた」と感じるほどの食欲を取り戻す（263）。そしてまた再び創作意欲と詩作の才を回復させる。同時に、彼女はホステスの役割から自らを解放し、女性から男性へと性を衣装を着替えるかのように、スカートから綾織地のズボンと革製のジャケットに着替え、オーランドは古い友人の文豪達の待つ食堂に向かうのである。

> Then she strode into the dining-room where her old friends Dryden, Pope, Swift, Addison, regarded her demurely at first as who should say Here's the prize winner！ but when they reflected that two hundred guineas was in question, they nodded their heads approvingly. Two hundred guineas, they

> seemed to say; two hundred guineas are not to be sniffed at. She cut herself a slice of bread and ham, clapped the two together and began to eat, striding up and down the room, thus shedding her company habits in a second, without thinking. After five or six such turns, she tossed off a glass of red Spanish wine, and, filling another which she carried in her hand, strode down the long corridor and through a dozen drawingrooms and so began a perambulation of the house, attended by such elk-hounds and spaniels as chose to follow her. (*Orlando*, 301)

出版した詩で賞を受賞し、200ギニーの賞金を得ることで社会的な地位と名声を得たオーランドは、ホステスとして客人をもてなす「接待の習慣を放棄」し、自分のために食事を用意し、ワインを飲む。このようにオーランドが他人の食欲を満たすために、食べ物を提供するホステスから食べる女性になったことは、誰にも屈することなく、自立した精神でもって、創作に臨むことを可能にしている。「作家と時代精神との間の取引は、細心の注意を必要とするものであり、両者の間でどういった取決めがなされるかで、作品の成功は決まる」(254)。しかしオーランドは、時代精神の厳しい検問を通過し、もはや「時代と戦うことも、それに屈することもなく」(252－254)、時代の求める家庭内天使的な理想像に縛られずに、性別の拘束なしに、自由に詩を書くことが出来るのだ。この時「男性の力強さと女性の優美さ」(133) を合わせ持ったオーランドは、ウルフが理想的な作家の精神としている「両性具有の精神」[1] (*A Room of One's Own*, 128) を体現した理想の作家の姿として提示されている。

こうした食べ物に代表される物質的なものと精神的なものとの調和は、ウルフと同様にモダニズムの作家である E. M. Forster が *Howards End* の中で試みている主題でもある。ウルフは、"Modern Fiction" の中で、外的な事実を重視し、「精神ではなく身体に関心を抱いている」アーノルド・ベネットのようなリアリズムの作家を「物質主義者」(7) だと非難する一方で、身体を軽視し、内的な心理に重きを置く James Joyce のようなモダニズムの作家

を「精神主義的」(10) だと批判し、よい小説は、「知的な活動と身体の素晴らしさ」(12) を融合したものだと述べている。『オーランド』と『自分だけの部屋』を通して、このように精神と身体に対する食べ物の影響を探ることで、ウルフは、「心と体や脳」がいかに「融合した」ものであり、相互に影響し合っているのかを示しているといえよう。

「ウルフが教養に裏付けられた食い意地を持っていた」("Virginia Woolf", 246) とフォースターが述べているように、ウルフの食の描写は、彼女の知性がしみわたった豊かなものになっている。それゆえ今日の研究者によって、ウルフが摂食障害[2]であったと指摘されていることは驚くべきことかもしれない。Leonard Woolf は、彼女が、食べることを楽しんでいた一方で、「狂気の時には、食べることをいっさい拒否」し「食べ物に対するコンプレックス」を持っていたことを明らかにしている (557)。したがってウルフの食べ物に対する態度は、非常にアンヴィヴァレントなものであるといわざるをえない。しかしながら食べることを楽しみながらも、時に苦しみ、食べることに強くとらわれていたウルフだからこそ、鋭いフェミニスト的な洞察によって、『オーランド』と『自分だけの部屋』の中で、食の持つポリテックスを示すことが出来たのだといえるだろう。

注)

本稿は、京都女子大学英文学会2013年度大会 (2013年10月26日) での口頭発表「*Orlando* と *A Room of One's Own* における「教養に裏付けられた食い意地」」の発表原稿を加筆・訂正したものである。

1　オーランドは、ウルフの友人の Vita Sackville-West をモデルにしており、オーランドの両性具有性は、ヴィタの両性具有的な性質とも関わっている。

2　この点については、神谷氏 (22)、Showalter (268－269)、Glenny (viii－ix, 16－18) を参照。

参考文献

Angelella, Lisa. "The Meat of the Movement: Food and Feminism in Woolf." *Woolf Studies Annual*. Vol 17. Ed. Mark Hussey. New York: Pace UP, 2011.

Bowlby, Rachel. "Introduction." *Orlando*. New York: Oxford, 1992.

Dodd, Elizabeth. "'No, She Said, She Did Not Want a Pear': Women's Relation to Food in *To the Lighthouse* and *Mrs Dalloway*." *Virginia Woolf: Themes and Variations*. Ed. Vara Neverow-Turk and Mark Hussey. New York: Pace UP, 1993.

Forster, Edward M. *Howards End*. New York: Penguin, 2000.

—. "Virginia Woolf." *Two Cheers for Democracy Abinger Edition* Ⅱ. London: Edward Arnold, 1972.

Glenny, Allie. *Ravenous Identity: Eating and Eating Distress in the Life and Work of Virginia Woolf*. Hampshire: Macmillan, 1999.

Hope, Anneto. *Londoners' Larder: English Cuisine from Chaucer to the Present*. Edinburgh: Mainstream P, 2005.

Moran, Patricia. "Virginia Woolf and the Scene of Writing." *Modern Fiction Studies* 38. West Lafayette: Purdue U, 1992.

Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830 – 1980*. London: Penguin, 1987.

Woolf, Leonard. *Letters of Leonard Woolf*. Ed. Frederic Spotts. London: Weidenfield & Nicolson, 1990.

Woolf, Virginia. "Modern Fiction." *Selected Essays*. Oxford: Oxford, 2008.

—. "Mr Bennett and Mrs Brown." *Selected Essays*. Oxford: Oxford, 2008.

—. "Profession for Women." *Selected Essays*. Oxford: Oxford, 2008.

—. *To the Lighthouse*. London: Penguin, 2000.

—. "Lives of the Obscure." *The Common Reader*. New York: Harvest, 1984.

—. *Mrs Dalloway*. New York: Oxford, 1992.

—. *A Room of One's Own and Three Guineas*. New York: Oxford, 1992.

—. *Orlando*. New York: Oxford, 1992.

神谷美恵子『ヴァジニア・ウルフ研究』（神谷美恵子著作集４）みすず書房　1981.

武田美保子『〈新しい女〉の系譜―ジェンダーの言説と表象』彩流社　2003.

翻　訳

E. M. フォースター「ヴァージニア・ウルフ」『フォースター評論集』小野寺健訳、岩波書店　1996.